

1969 年、『ドラえもん』

——家庭の情報化をめぐる試論——

新 倉 貴 仁

序章——ミドルクラスの物語

2023 年 10 月に放送されたテレビアニメ『ドラえもん』の新しいエピソードのなかで、自転車に乗ったジャイアンがヘルメットをかぶって登場する。この年の 4 月、改正道路交通法が施行され、自転車利用者のヘルメット着用が努力義務となった。この法制度の変更を反映したものであったのかもしれない。法令とその遵守がテレビアニメの表象にどのような影響を与えるのかということは、それ自体興味深いテーマである。だが、ここでは、自転車利用時のヘルメットの着用が現代的な現象であることを確認できればよい。すなわち、アニメ『ドラえもん』の世界は、現在の世界として描かれており、視聴者にとってそのような物語として受容されている。ここではないどこかの物語だが、いまの物語である。

このようなことをことさらに強調する理由は、原作となる『ドラえもん』の漫画が、半世紀以上も前にあたる 1969 年に始まったからである。現在もテレビシリーズが続き、毎年のように劇場版が製作され、『ドラえもん』の作品はすでに産業化されて久しい。そのあいだ、細部の描写は変わるが、登場人物や活動する舞台の設定は大きくは変わっていない。この半世紀以上におよぶ耐用年数は、『ドラえもん』が描き出す世界のもっともらしさ、あるいは実定性の根強さをしめしている¹⁾。

もちろん、このような持続性は、日曜の夕方 6 時台に放送されている『サザエさん』や『ちびまる子ちゃん』などの長寿のアニメーション番組にも見出すことができるであろう。『ドラえもん』にせよ、『サザエさん』にせよ、『ちびまる子ちゃん』にせよ、都市のミドルクラスのライフスタイルを描いている。ただし、家族の構成には差異がある。『サザ

エさん』と『ちびまる子ちゃん』は、いずれも拡大家族の物語である。『サザエさん』においては、波平とフネの夫妻の家族と、その娘のサザエとマスオの夫妻の家族が同居している。静岡県清水市という地方都市を舞台とする『ちびまる子ちゃん』でも、まる子は、両親と姉とともに、祖父母と同居している。それに対して、『ドラえもん』は、郊外の一軒家に、父母子の核家族として暮らしている。また主要登場人物のうちジャイアンを除いたメンバーのいずれもが「一人っ子」であり、現在の少子化した家族形態を先取りしているようにも感じられる²⁾。

実際、のび太の家は典型的なサラリーマンの家庭として描かれている。初期の漫画には父が通勤する場面が描かれる。断片的に示された駅名の表示からは、のび太の家が小田急線沿線にあることが推測される³⁾。原作者である藤子・F・不二雄の自宅は川崎にあり、小田急線沿線にはその名を冠したミュージアムがある。とはいえ別の地名を示す手掛かりもあり、物語の場所を小田急線沿いと確定することはできない。いずれにせよ『ドラえもん』は都心に通勤する郊外の家族の物語であることを確認しておきたい。

このような家族の形態に注目するとき、『ドラえもん』が連載されていた雑誌が小学館の学習雑誌（あるいは学年誌）であったことは興味深い⁴⁾。この雑誌は子どものみならず両親のまなざしが意識され、同時期における家庭や子どもをめぐる想像力のせめぎあいのなかに位置していた⁵⁾。1969年、藤子・F・不二雄の漫画『ドラえもん』は学年誌の1970年1月号で連載が開始された。その前号にあたる1969年12月号に予告のカットがしめされる。すでに藤子・F・不二雄は『オバケのQ太郎』、『パーマン』といったヒット作を送り出し、『ドラえもん』は『ウメ星デンカ』に続く連載であった。

『ドラえもん』の物語は、のび太の部屋からはじまる。のび太の部屋には、机と椅子、本棚がある（図1）。のび太は椅子に座って、机に向かい、本棚には十分な量の本がならぶ。しばしば本を手に取り読む姿も見受けられ、本を読む行為において、のび太は劣等生ではない⁶⁾。

本論文は、『ドラえもん』を、それが連載される1969年という文脈にさしもどし、そこに秘められている想像力を摘出することを目指す試みである。とりわけ、『ドラえもん』におけるモノの配置に着目することによって、あらためてその物語を同時代の社会状況に組み込むことを目

指す。ドラえもんとはどのような物語であり、ドラえもんとは何モノなのであろうか。そこに仮託されている人びとの願いや望みや欲望はいかなるものなのであろうか。

以下では、『ドラえもん』の連載がはじまった1969年の時代状況を、情報化というより大きな社会の変化のなかで考察する。そのうえで、1960年代における学習機の位置を論じる。次に、のび太の本棚におさめられていたであろう書物に注目し、戦後における重要な商品となった百科事典に注目する。これら二つのモノは、オフィスと家庭の境界を揺るがすものであった。

また、書物と知識が家庭にインストールされ、ライブラリーをつくる点で、PCやインターネットの普及に先行する、「日常生活における情報探求行動」(Aspray and Hayes 2011: 330)あるいは「家庭の情報化」として考えることができる。



図1 連載第一話に描かれたのび太の部屋
(藤子・F 2019: 6)

第1章 メディア論と書物史の視点から

■高度成長末期と情報化

1969年は高度成長期の末にあたる。1960年代末から1970年代はじめは、日本における消費社会の成立や家族の変容などが集中的に観察される転形期である。そしてそのような変化は、書物というモノと人との関わりにも波及している。

このような1960年代末ごろ生じた、書物と人との関わりの変化の先行研究として、竹内洋の『教養主義の没落』(2003)を位置づけること

ができる。それは、旧制高校のエリート文化としての「教養主義」が高度成長期に減退していくさまを描き出すものである。竹内は、「農村と都会の、そして西欧と日本の文格格差」を「教養主義」の条件と考え、高度成長期を通じた二重構造の解消が書物や学生をめぐる文化の変容を生じさせたと論じる（218-220）。高度成長期に書物と人との関わりの変化が生じたことについて、本論文は同意するものである。だが、それを「教養主義の没落」と呼ぶことは魅力的ではあるが、なおその枠組みを採用するにはいくつか立ち止まって考えるべきことがあると思う。

第一に、「教養主義」の概念の歴史性を考慮すべきである。竹内（2003）のなかの「教養主義」の概念は変幻自在である。旧制高校のエリート文化として身体化された性向を指す場合もあれば、マルクス主義と対置される場合もあれば、岩波書店という特定の出版社と出版物と結びつけて論述される場合もあれば、大学を離れ「大衆教養主義」という概念が用いられる場合もある⁷⁾。さらに、別のところでも論じたが、「教養主義」自体が適応的に仮構された概念である。教養主義の一つの源は、戦後、唐木順三が、戦前の三木清が第一次大戦直後の自身の読書生活を回顧している文章にもとづき、大正教養主義を非政治的な言説として論じたことにある⁸⁾。だが、そもそも、その三木の回想をどこまで一般化できるのかという問題がある。第一次大戦後の時期は、学生や知識人の社会運動が活発化した時期であり、「文化」や「教養」の概念は強い政治性をもっていた（新倉 2017）。

第二に、「教養主義」を論じるとき、知識人と大衆という二項対立が呼び込まれてしまう。岩波文化と講談社文化という対比は、たしかにわかりやすい。だが、岩波文化を享受するとされる知識人も、講談社文化を愉しむ大衆も、大量生産を組み込んだ産業社会化のなかで出現する。また、1990年代に教養主義をめぐる議論が展開されたとき、参照されていたロジェ・シャルチエらの読書行為論は、知識人と大衆の対立の批判的な問い返しを目指していた⁹⁾。くわえて、「教養主義」をめぐる議論は、学生とサラリーマンの文化を基本とし、女性や子どもの読書をその派生として捉えてしまう。だが、家庭の空間における、女性や子どもと書物という主題には、異なる光のあて方が可能であろう。

そして第三に、「教養」という概念を中核に据えることによって、書物が「読む」ためのモノに限定されてしまう。だが書物は、展示され、

所蔵され、参照され、使われるためのモノにもなりうる。他者に対する卓越性を示すためには書棚に飾ればよい¹⁰⁾。この場合、特に読む必要はない。さらに事典や図鑑や辞書の類いは、そもそも「読む」よりも「参照」に用いられる。ひるがえって、1960年代から1970年代にかけて、おびただしい種類の全集や事典の出版企画が登場している。このような出版産業の隆盛を考えたとき、そしてそれを購買する多くの消費者を考えたとき、衰えていったものを教養主義と呼ぶのか（教養主義の没落）、栄えていったものを教養主義と呼ぶのか（大衆教養主義）、混乱が生じる¹¹⁾。

本論文では、書物というモノと人との関係を考えるにあたって、「教養主義」という議論の磁場から離れ、代わりに、同時期に生じていた「情報化」をめぐる言説のなかにおくという戦略を採用したい。そのとき、「家庭の情報化」や「日常の情報化」といった別の文脈がみえてくるであろう。企業や行政といったオフィス空間で発達したモノや思考が、家庭の空間にも入り込んでくる。これは、家庭と職場、マイホームとオフィス、プライベートとパブリックといった主題にも関わるであろう。

■書物と情報化

書物の歴史から現代の情報化を考える議論は、書物史研究の重要な領域である。情報化は計算する技術（computing）だけでなく、文字や書字の技術（writing）の発達によっても生じている。

このような文字や書字の技術から情報化を考える議論として、初期近代ヨーロッパにおける手稿ノートやリファレンス書に注目し、文書管理技術の歴史を追跡するアン・ブレアの『情報爆発』を挙げることができる（Blair 2010=2018）。ブレアはさらに、書物史の研究の成果をふまえた「情報」についての広範な事典の編纂に参加している。ブレアらの議論は、アルファベット順の配列、索引、参照しやすいレイアウトから、販売目録や在庫目録のようなリストの研究にまで及ぶ（Blair et al. eds 2021）。

抜き書きに由来するペーパー・スリップやカードの歴史の研究は、ドキュメントやファイルを含んだオフィス機械の研究につながる。また、ヴァネバー・ブッシュのMEMEXの構想以前に、戦前から書物情報の索引の問題を扱っていたポール・オトレらについての研究も積み重ねら

れている¹²⁾。戦前にすでに発達していたマイクロフィルムの技術にもとづいて、科学情報や書誌情報を収集、蓄積し、ネットワーク化させる試みであり、現在のインターネットのもうひとつの起源として考えることができる。

これらはいずれも「情報爆発」あるいは「情報過多」への対処の問題である。ブレアの議論は初期近代における活版印刷術を通じた書物の生産、さらには、新世界の発見、古代ギリシャの文献再発見、世俗の大学の台頭といった知識への需要の増大に光をあてる。オトレの試みは、19世紀末から20世紀初頭にかけての第二次産業革命を通じて生じた、出版物の増大と知識の需要の高まりに対応したものであった。

書物の歴史から情報化を考える議論は、書物というモノ自体や、読むという行為そのものをあらためて考え直す視点を与えるものである。そして、戦前から戦後にかけて、日本社会では「事務能率」という主題のもとで、漢字の制限や左横書き、文書の整理、帳票やカードの発達、さまざまなタイプライターの開発、謄写機などの複写機械の開発が進行していた¹³⁾。1969年とは、そのような事務をめぐる技術がある段階に到達した時期にあたった。

■もうひとつの1969年——『知的生産の技術』

このような事務能率の議論の高まりという文脈で考えるとき、1969年にもうひとつのベストセラーが出版されていることは示唆的である。すなわち、梅棹忠夫の『知的生産の技術』である¹⁴⁾。梅棹のこの書物は、ブレアらが扱っていた「情報爆発」あるいは「情報過多」に対する一つの回答の試みである。

同じ1969年に出版された『ドラえもん』は、現在までも続くベストセラーである。書店では現在も「てんとう虫コミックス」が棚にならぶ。手許にある1巻は2023年1月20日発行の第261刷のものである。さすがにこの規模には及ばないが、梅棹のこの本も、人文関連の新書としては、異例のベストセラーである。手許にある本は、2025年5月2日発行の第107刷のものである。

『知的生産の技術』が明確に論じているように、同時期には「情報化」や「知識産業」といった言説が多く展開されていた。「コンピュータ」のような理想が語られる一方で、「管理社会」批判も展開されてい

た。いずれも電子計算機を中心とする情報技術の社会へのひろがり念頭にいたものであったといえよう。

日本における情報化の歴史において、1970年前後はひとつの画期となる。国産電算機の開発が進む一方で、通信技術と電子計算機の技術の融合がすすみ、地銀ネットワークや航空券予約システム、また国鉄のMARSなど、「オンライン・リアルタイム」で情報を処理する技術がひろがっていった（新倉 2018；新倉 2025）。

このような電子計算機のひろがりを背景として、書類や文書をめぐる生産の技術や整理の技術に注目があつまる。社会学者の加藤秀俊は1963年の『整理学』のなかで、「連絡」の増大、速記などの記録技術、スクラップブックの作成、家庭におけるさまざまな書類の整理を論じている。加藤も梅棹と同様に同時代における「事務革命」に注目している（加藤 1963）。

梅棹らが論じるように、戦後、事務機械の発達と大衆化が生じ、機械を通じた情報の整理が普及する。このような現象はまた、1960年代に増大した全集や講座といったシリーズものの刊行とあわせて理解されなければならない。この時期、「教養主義の没落」というテーゼが示すような「読む」ことの頹落が起きたというよりも、膨大な書物やデータの到来をまえに「読む」ことの意味が変わったと考えるべきではないだろうか。書物は読まれるかもしれないが、なによりもまず購入され、蔵書となり、家庭のライブラリーを構成する。そのような購入と所蔵の実践は、「カタログ」などを通じて、消費社会へと開かれていく¹⁵⁾。

第2章 『ドラえもん』のなかのモノ(1) ——机に注目して

このような社会の情報化や、事務機械の普及といった文脈を背景として、あらためて『ドラえもん』の物語に注目してみよう。第一に考えてみたいのが、机である。ドラえもんにおける机の象徴性については言うまでもないであろう。のび太の机の引き出しが、タイムマシンのゲートとなり、未来の世界と接続する。キャラクターが決まる前に描かれたという予告のイラストは、机の引き出しから何かが飛び出すということを強調するものとなっている（図2）。

ここで、『オバケのQ太郎』と『パーマン』という先行作品の机に注



図2 『小学四年生』1969年12月号に掲載された新連載の予告
(藤子・F 2019: 77)

目してみよう。『パーマン』では、すでにのび太のものと同様の机と椅子のセットがおかれている。他方、それに先行する『オバケのQ太郎』では、主人公は座りながら机に向かっている(図3)。『パーマン』の主人公に関しては、居間にソファがあり、ある程度の階層の高さが示唆されている¹⁶⁾。また主人公は、テレビで海外のニュースを気にする程度に、知的である。庶民性が強調され、なまけもので勉強ができない子の象徴となってしまうのび太とは、少し位相が異なる。

勉強ができないのび太と、立派な机と椅子のセットは、不釣り合いにも見えるが、同時期の

婦人雑誌には「子供部屋」の特集が生まれ、また子ども用のデスクセットの広告がならんでいた。たとえば1965年3月号の『婦人倶楽部』では、「お子さまを勉強好きにする学習机・椅子・本棚の選び方」という特集が組まれている(図4)。特に机と椅子の高さ、机の広さ、材質と機能、色彩とデザインなどが論じられ、「子どもの成長に合わせた机と椅子の使い方」が説明されている。記事の横には、岡村製作所の「オカムラ学習セット」、葛西製作所の「チトセの勉強トリオ」、内田洋行の「トーホーミリオンラック」の広告と写真がならぶ。1966年3月号の『婦人倶楽部』では、「子どもの学習と情操教育のために」という特集が生まれ、同様に内田洋行の「トーホーミリオンデスク・チェア」、葛西製作所の「チトセのヤング学習シリーズ」、岡村製作所の「高級学習セット」の広告がならぶ。

注目すべきは、岡村製作所、葛西製作所、内田洋行といったメーカーが事務機器の提供者でもあることである。『婦人倶楽部』には登場して



図3 座づくえで勉強する『オバケのQ太郎』の主人公
 (『小学五年生』17(12)、1965年)



図4 『婦人倶楽部』の学習機の特集と広告
 (『婦人倶楽部』46(3)、1965年)

いないイトーキも含め、戦後の事務機械の雑誌に頻繁に広告を出している。学習機はなによりも事務機の係累なのである。

スチール・デスクは戦前においても限定的ながら製造されていた。戦

後、GHQ の発注を通じ、規格が整備され、産業化が進み、上記のメーカーが製造能力を増大させていく¹⁷⁾。スチール・デスクの大量生産は1960 年ごろに整ったとされる。オフィスに向けた販売が飽和した先に、新しく見出されたのが子ども用の机の市場であった¹⁸⁾。「学習づくえ」として、各事務機のメーカーが製品をリリースする¹⁹⁾。団地の生活がひろがり、食卓でのテーブルの利用もすすみ、それぞれの家には子ども部屋が用意されるようになっていた。このようなライフスタイルの変化のなかで、「学習づくえ」という、子ども用の事務机が普及していったのである。

梅棹忠夫は、『知的生産の技術』のなかで、「事務用家具」について次のように言及している。

そのような機械類のことをもちださなくても、もっとかんたんなところで、条件の変化はおこっている。たとえば、紙、ノート、カードのたぐいの、ほとんど無制限の供給は、学生文化のありかたを、むかしのものとはすっかりかえてしまった。万年筆のようなものだって、つい30 年ほどまえまでは、「貴重品」としてあつかわれていたのである。また、スチール製の事務用家具の発展は、知的生産の技術に対して、あたらしい条件をつくりだしつつある。ファイリング・ケースやカード・ボックスのたぐいが、家庭や中学生の部屋にまではいりこみはじめたのである。こういうものの普及なしには、資料の整理などといっても意味をなさないであろう。(梅棹1969: 17)

1960 年代、オフィスでの事務用品の大量生産体制が整うとともに、家庭が新しい市場として注目される。家庭の方でも子どもの「教育」が重要な主題となる。梅棹が「知的生産の技術」と呼ぶものが、事務の空間から家庭の空間へと流れ込む。

とするならば、のび太は将来にオフィスで働くべく訓育される数多の子どもたちのうちの一人であるということになるのかもしれない。

第3章 『ドラえもん』のなかのモノ(2) ——本棚と事典

次に、本論文が注目したいのは本棚である。本棚は、「子供部屋」の重要な構成要素として、先に引用した婦人雑誌の記事でも取り上げられていた。だがもうひとつ重要な文脈であるのが、その本棚におさめられていたであろう書物である。『ドラえもん』が掲載されていた学習雑誌(学年誌)は、図鑑や文学全集など、さまざまな企画出版の重要な広告媒体でもあった²⁰⁾。そしてその企画出版のなかでもとりわけ規模が大きかったのが百科事典であった。

1960年代は百科事典ブームの時期である²¹⁾。数多くの出版社がさまざまな百科事典を販売しているが、そのなかでも鎬を削ったのが平凡社と小学館であった。

平凡社の『世界大百科事典』は林達夫が編集長を務めたことでも知られるが、1955年全32巻で刊行された。『朝日新聞』(1955年3月1日付)に掲載された広告には、「世紀の大業成る!」と書かれ、「世界的視野」「現代の自然科学・工学技術における最高水準の成果を網羅」「最近の重要な発見・研究業績を漏れなく採録」「科学と生活との統一を^{ママ}迫及」といった言葉がならぶ。全巻一時払(一括払い)の金額は、上製本で50,000円、特製本で62,000円であった。1958年の広告ではそれぞれ、64,000円、80,000円となっている。1960年の映画に登場する事務職の女性の月給が10,000円であったことを考えると、「わが家の財産は世界大百科!」という広告表現も納得できる。掲載されている写真には、百科事典がおさめられた二段の棚の上で、母と息子が百科事典をめくり、左側にのぞき込む父、右側に床で百科事典を開く娘の姿が配置される。居間であろうか、百科事典のまわりを家族が取り囲んでいる(図5)。

1961年、平凡社は、普及版として、『国民百科事典』を刊行する。『朝日新聞』の広告では、「みんなが待っていた みんなが欲しかった 一万円百科 誕生!」と書かれている。

百科事典は、いまや生活の必需品です。この国民百科は、家庭の日常生活——主婦のお買物案内から、ご主人のお仕事の知識、マス・コミから入ってくるいろいろな疑問の解決、小学校から大学ま

世紀の偉業 堂々完成！

わが家の財産は 世界大百科！

全32巻完成記念 予約大募集

平凡社 下中 第二部

本書は、わが家の財産として初めて揃えやすく、買いやすい方法！

配本は16カ月！ 毎巻払
代金は32カ月払 一時払

学校 官公庁の特典

学校に！
会社！
工場！
官公庁！
ご家庭！

東京タワーに！

平凡社

完成感謝状

図5 『世界大百科事典』（平凡社）の広告
（『朝日新聞』1958年12月4日付）

での学習や家庭娯楽まで……家ぐるみ楽しく使える百万家庭の相談相手（コンサルタント）！みんなが欲しかった家庭百科の決定版です（『朝日新聞』1961年1月9日付）

広告が強調することは、百科事典が生活必需品となり、「家庭」を豊かにするものであるということである。その意味で、百科事典はテレビや電気掃除機、電気冷蔵庫、電気洗濯機といった家電に次いで購入されるものとして位置づけられている。1962年5月28日付の『朝日新聞』に掲載された広告では、「宇宙時代のホームエンサイクロペディア」が

うたわれ、すでに 35 万組の注文があり、「60 世帯に一組」の割合で普及していると書かれる。さらに 1967 年 11 月 24 日付の『朝日新聞』に掲載された『世界大百科事典』全 26 巻の広告のなかで、平凡社は「一家庭一百科運動 An Encyclopedia in Every Home」をかかげている。

平凡社の『国民百科事典』の刊行が完結した 1962 年 8 月に、小学館は『日本百科大事典』全 13 巻の刊行を開始した。『朝日新聞』の 1962 年 4 月 30 日付の広告では「ない項目がない！これがホントの百科事典です」というコピーがおどりと、「新しく 充実した 有用で 親しめる 家庭の文化財誕生！」と書かれる。そして、『朝日新聞』の 1962 年 8 月 18 日付の広告では、「てまめにひいて、どんどん身につけた確かな知識の上に、健全な家庭が築かれていく……冷蔵庫よりクーラーより大切な家財道具、それが〈日本百科大事典〉なのです」と書かれる。『国民百科事典』と同様に、またそれ以上により明確に、百科事典が「家庭」のためのメディアであることが強調されている。

『日本百科大事典』の広告は、小学館の学習雑誌（学年誌）にも掲載される。『小学四年生』の 1962 年 5 月号の広告は文字だけで構成され、「みなさんのまいにちには小学館の〈日本百科大事典〉が必要です」と子どもたちに呼びかけ、親に向けても次のように呼びかける。

“最近の学校の新しい学科内容についていけなくなった 宿題や質問にとまどうことがしばしばある”という声をよく耳にしますが、こうした時に親であるあなたがとまどえば、お子さまにあたえる心理的影響は大きいといわねばなりません。でも小学館の、〈日本百科大事典〉があればもうだいじょうぶです。

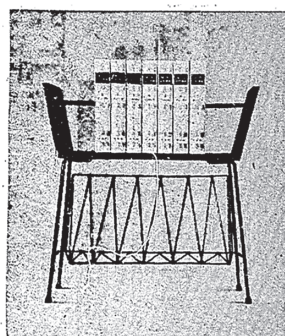
小学館の〈日本百科大事典〉はまちがいなく家庭教師の役をりっぱにはたしてくれることでしょうし ご両親の知識の再確認と補充に十分役立つことでしょう。

『小学四年生』1962 年 6 月号の広告の図像では、母親が子どもとともに百科事典をのぞき込んでいる（図 6）。そして、傍らに「もうひとりの家族 誕生！」と書かれる。このような家族の中心にある百科事典という関係は、平凡社の広告でもみられたが、ここではより強調されている²²⁾。



図6 『日本百科大事典』(小学館)の広告
(『小学四年生』41(3)、1962年)

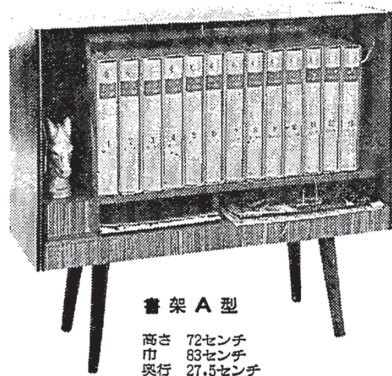
百科事典は、同時期のテレビと同様に、家族の中心にあるメディアである。いや、百科事典の購買時に予約特典として提供される専用の棚が、テレビを想起させるデザインとなっていることを考えると、百科事典はテレビの等価物であったといえるかもしれない²³⁾(図7、8)。それだけではない。百科事典は、良き相談相手となる家族の一員として表象され



平凡社

東京都千代田区四番町 振替東京29639番

図7 特製書架 平凡社
(『朝日新聞』1961年1月9日付)



書架A型

高さ 72センチ
巾 63センチ
奥行 27.5センチ

図8 特製書架 小学館
(『朝日新聞』1962年8月18日付)

た²⁴⁾。

なお、『小学館の80年』によれば、『日本百科大事典』の売り上げが130万セットであり、『国民百科事典』が140万セットであったとされる。このような小学館の販売を可能にしたのが「学年誌の家庭への浸透」であり、「北陸のある都市での購買層」を調査したところ、「56%が児童のいる家庭だった」（小学館総務局社史編纂室編 2004: 245）。

第4章 百科事典というメディア——『百科事典操縦法』

1969年の『知的生産の技術』の前後、梅棹は、未来学など、さまざまな領域で議論を展開している。このなかには、小松左京、加藤秀俊とともに執筆した『百科事典操縦法』が含まれる。この本は1973年に平凡社から出版（配本）された。『世界大百科事典』で予告され、その読者に送付されたものであった。

タイトルがしめすように、百科事典は操縦（operation）を必要とする機械である。もちろん購買し、装飾品としてストックするだけの家庭も多かったのかもしれない。だがそのような状況になることはすでに織り込み済みでもあったといえ、むしろ必要なときに使用できるという安心感で十分であったのであろう。また、購買によって他の家庭に対して卓越化を図っていたと考えることもできるかもしれない。だが、広告では、むしろ、みな持っているのになぜ買わないのかという説得のことが用いられている。そして、百科事典は、テレビの付近におかれ、テレビを補完するものとして構想される。1972年の『世界大百科事典』の広告では、「知識のファイル」と表現されている（『朝日新聞』1972年5月8日付）。

『百科事典操縦法』で示される使用例のなかには、項目をカードに抜き書きし、自らのストックをつくることが挙げられる（梅棹・加藤・小松 1973: 39-40）。また、旅行に際して、関連項目のページをコピーして、ガイドとして使うことが提案されている。このため、『百科事典操縦法』のなかでは、コピー機械と連携した使用が推奨されている。

百科事典を活用しようと思うなら、コピー機械もいっしょに購入する事をおすすめしたい。コピー機械といっても、事務用に使うよ

うな、大型で高価なものを買う必要は無い。最近では、わずか数万円の値段で、きわめて使い方の簡単な、乾式のコピー機械が手にはいるようになっている。ただし、百科事典の1ページがとれるぐらいの大きさでなければならない。百科事典の出版社が、販売サービスをしていいくらいである。コピー機械そのものも、場所をとらないし、重量も3キログラム以下で、持ちはこびも簡単なものがある。(梅棹・加藤・小松 1973: 54)

そして複写の作業を、妻が担うことを提案する。「家庭の主婦は最近では時間的にかなり余裕を持っているから、「知的生活」の充実に協力してもらってもいいだろう」。百科事典をコピーし、カットし、ペーストすることが推奨され、主婦は秘書となり、家庭は事務空間となる²⁵⁾。

『百科事典操縦法』のなかで強調されることは、百科事典が「情報化」のツールであることである。それは家庭にインストールされることで、家庭の「情報環境」(梅棹・加藤・小松 1973: 79)を革新する。百科事典をオペレートできるものが、情報化社会のなかで「期待される人間」なのである。

情報社会での「期待される人間像」とは、じぶんの力で情報をさがし、しらべ、それをじぶんのものとする能力をもった人間であろう。とにかく、コンピュータにたよっていれば、なんでもわかる、という安易な情報神話は、人間の情動的な自律を実現させてくれないのである。(梅棹・加藤・小松 1973: 83)

私たちがコンピュータを購入し、インターネットに接続し、「ググる」ように、高度成長期の終りごろ、百科事典はそれぞれの家庭に「情報」をストックするものであった。百科事典は読むための書物ではない。検索し、参照するための機械なのである。

このようなインターネット(あるいはPC)の前身としての百科事典の性格は、『百科事典操縦法』のなかから、強く読み取れる。同時期のMIS(経営情報システム)の発達と絡めながら、マイクロフィルムを用い、カード式の検索を行うなど、プッシュのMEMEXに近い発想が語られている(梅棹・加藤・小松 1973: 144-174)。情報の更新、共有など、

Wikipedia が実現していくことであるのかもしれないが、ここには百科事典から現在のインターネットへという「情報化」のもうひとつの道筋が見えてくる²⁶⁾。

おわりに——デスクトップとスマートフォン

本論文では、『ドラえもん』を1969年という時代にさしもどし、とりわけのび太の部屋にあるモノに注目してきた。そこには事務机が描かれ、情報のストック（百科事典あるいは図鑑）が構想されていた。情報社会、消費社会を特徴とする現代社会のなかで、のび太の物語は離陸している。机、書棚、ライブラリーは、テレビやコピー機といった機械と連携し、家庭をオフィスの空間に変えていく。「家庭の情報化」とは、そのような日常生活におけるモノや機械の生態系の変容をさす。高度成長期、家庭の空間のなかに情報への欲望が醸成されていったのである。

本論文を締めくくるにあたり、「教養主義」との関係、本論文の展望、そしてドラえもんとは何モノなのかという問いへの回答を試みたい。

■教養主義の磁場を離れて

本論文は、「教養主義」の磁場から離れ、書物と人との関係を考えてみることを提案した。もちろん、本論文でみてきた1960年代の子ども部屋にみられる教育する母や、参考書や百科事典の普及は、進学や学歴と密接に関わるものであり、「教養主義」がより拡散した状況とも記述できるであろう（「大衆教養主義」）。だが、これらの経験は大学生のようなエリート層に限定されるものではなく、「没落」と表現できるようなものでもない。

たしかに百科事典は「教養」のメディアである。実際、平凡社の百科事典の編集長は林達夫、加藤周一といった人物が務めており、無数の大学人や知識人、文化人が執筆者に名を連ねる。また、そのような百科事典を購入することが、他者に対する示差的な行為となった側面は、たしかにあるだろう。だが、所有を通じて他者と差をつけるとか、家の格をあげるためというのは、当時の欲望の社会性に対する解像度としては十分ではないのではないのか。

百科事典は数百万セット販売されたのであり、「みせびらかし

conspicuous」を第一の誘因であったとみることは難しい。ある程度
の家庭が所有しているものならば、たいした「みせびらかし」にはなら
ない。むしろ、家電製品に類される語りや、「みなもっている」という語
りは、ミドルクラスのライフスタイルの獲得、標準的な生活への到達を
呼びかける。もちろん、財としての百科事典は、家庭内教育を改善させ、
子どもの成功や出世に貢献するであろう。だが、より根源的には、家庭
を「ちゃんとしたもの respectable」にしたいという欲望があったので
はないだろうか。

さらに、成功や出世、学歴の獲得、他者との差異化、みせびらかしな
どの功利的な欲望ではみえてこないことは、1960年代から70年代の高
度成長期の後期に生じていた「情報」への強い欲望である。百科事典は
なによりライブラリーを家庭に所持すること、常に情報を検索・取得可
能にすること、新聞やテレビから得られる「情報」を処理することを可
能にするメディアであった。また、マイホームという共同性を内側から
支えるメディアの一つであり、住宅や家電のようなモノと類比される。
そしてミドルクラスの家庭は、一つの企業として、受験というプロジェ
クトに向かっていき、家庭はその事務所となり、母は子どもの秘書とな
り、そのマネージャーとなる。「家庭の情報化」という主題が垣間みせ
るのはそのような光景である。

家庭の情報化の成果は、受験の成功（偏差値）やより多い年収といっ
た数値化された指標で測定可能なもののようにも思える。だが、人びと
の欲望はそのような功利性に還元されるものではない。そこには情報そ
のものに向けられた欲望がある。だから、他のモノではなく百科事典が
ここまで普及したのではないか。それは、書物というメディアへの、こ
の時期に固有の社会性をもった欲望である²⁷⁾。

もちろん、これもまた「教養主義」だと呼ぶことはできるのかもしれ
ない。だが、私たちとしては、もうすこし微細な欲望の変化、あるいは
欲望の社会性の変化をみていきたい。高度成長期、消費社会や情報化社
会の到来が論じられるように、日本社会にはそれまでと異なる欲望が出
現しつつあった。そのある側面はたしかに「教養主義の没落」と呼びう
る。しかし、これは、もっと巨大な、日本人の共同性や社会性、欲望の
あり方の変質という、きわめて大きな物語の末の情景でもある²⁸⁾。そし
て、問題は、変質してしまった欲望の以前のかたちとともに、それ以降

に変質した新しい欲望のかたちである。消費社会論はそのような欲望を見つめようとし、また情報社会論も同じ問いを共有していた。ここに現代社会論の課題がある。

■展望——家庭の情報化と「オタク」再考

以上の本論文の議論はどのような展望を切り開くであろうか。

第一に、本論文は「家庭の情報化」を扱っているが、それはオフィスの情報化と並行している。企業規模の拡大、関係する人やモノの複雑化、経営の高度化を通じて、「事務」と呼ばれる情報処理が、企業活動のなかできわめて大きな意味を持つようになる。机や椅子、本棚はそれぞれ「情報環境」を構成するための重要なモノであったのである。このような機械や知識がどのように家庭のなかに入り込んでいったのか、それはとりわけ妻や子どもといった存在にいかなる影響を与えるものであったのだろうか。平凡社の『百科事典操縦法』は、妻を秘書と描き、明らかに夫をアドレスとしていた。だが、小学館の百科事典の広告の家族のなかには父の姿が零れ落ちているものもある。1970年代以降の家庭空間、知、教育といったテーマが見えてくる。

第二に、「オタク」と呼ばれる独特のモノへの志向、身体性を考える視点が得られるのではないだろうか。「オタク」をめぐるのは共同性や閉じたコミュニケーションなどの観点から論じられることが多い。だが「オタク」とはなによりも情報的存在である。1960年代後半から1970年にかけてつくられた情報を充満させた子ども部屋の空間は、1980年代から1990年代にかけて登場してくる「オタク」の前身であるとみることができるのではないだろうか。「オタク」についてはすでに東浩紀が「データベース」という概念で情報との親和性を指摘している（東2001）。だが、もう一歩すすめて、情報とデータの蓄積、索引といった実践がオタク文化の本質であると考えることができるのではないだろうか。消費社会の関数として「オタク」をみる視点は、同時に、「情報」や「データ」が消費社会の本質となるという展望を開く²⁹⁾。

■ドラえもんとは何モノであろうか

さて、ではドラえもんとは何モノなのであろうか。それは小学館の『日本百科大事典』の広告が宣言したように、「もうひとりの家族 誕

生！」である。机から出現した未来のネコ型ロボットは高性能で、博學で、デスクと深く結びついた電子計算機である。そればかりか、ドラえもんは、「あんな夢こんな夢」をみんなかなえてくれる。

このような未来への夢を体現した機械を、私たちは日々、携帯し、使用している。スマートフォンである。さしあたり、私たちは空を飛ぶことも、モノを大きくしたり小さくしたりすることも、時間を超えて旅したりすることもできない。だが、衛星画像を表示し、ドローンから撮影した画像が入手可能で、容易に「ググる」ことのできるスマートフォンは、限定はされながらも「あんな夢こんな夢」を実現してくれているのかもしれない。逆に、私たちの欲望は、スマートフォンで実現可能なものへと成型されているともいえる。こういったことは生成 AI が実装されるにつれ、より加速している。

さらに、スマートフォンは、ドラえもんよりも親密な存在である。目を持ち、耳を持ち、触覚を持ち、私たちは四六時中それを撫でまわしている。そして寝るときは枕元におくことすらある。ドラえもんがつつましく押し入れて眠るのは異なっている。あるいは、ドラえもんの寝場所は、百科事典や PC がのちにしまいこまれることになる空間を示しているのだろうか。

付記：

本研究は JSPS 科研費 23K01778 の助成を受けたものである。

注

- 1) くわえて『ドラえもん』は海外でもひろく受容されている。白石 (2013) を参照。
- 2) 『ドラえもん』という作品に関する先行研究として、古典的なものに南 (1981) や副田 (1983) がある。いずれも高度成長期以降の都市、家族、社会意識の変容との関連でこの作品を論じている。近年のものでは、横山 (2005)、稲田 (2017)、杉田 (2020) を参照。とりわけ、森下達は、図鑑や SF プームとの関係を論じることで、『ドラえもん』をめぐる想像力に独自にアプローチしている (森下 2018; 2020)。本論文もまた、机と百科事典というモノに注目し、「情報化」という同時代の現象のなかに位置づけることを試みるものである。
- 3) 初期のエピソード「地下鉄をつくっちゃえ」では、都心に出かけたのび太、ドラえもん、母が、通勤帰りの父と出会うシーンが描かれる。吹き出

しでかくされた駅名の表示からは新宿と南新宿が想起される（藤子・F・不二雄 1974: 129）。

- 4) 学習雑誌を主題的に扱った研究としては、河野（2015）、毛利（2021）を参照。佐藤卓己も学習雑誌についての小文を著しているが、扱われるのは『蛍雪時代』である（佐藤 2016）。
- 5) たとえば 1964 年の『小学四年生』の巻末には、「PTA のひろば」というコーナーがあり、「小学館編集顧問の先生方」が写真入りで掲載される。それ以外にも、しばしば「おうちのかたにみせてください」、「おかあさんといっしょにみるページです」といった指示が頻出する。
- 6) 森下（2018）は、のび太の部屋における図鑑に注目し、戦前以来の図鑑の系譜を描き、さらには『ドラえもん』自体の図鑑も出版されていることに注目している。特に「カタログ的要素」という指摘は本論文の議論との関連でも重要である。書棚の研究としては、柴野（2009）、Petroski（1999=2004）、山森（2019）を参照。また子ども部屋についての研究としては柏木（1991）、岩田（2018; 2020）を参照。
- 7) 「教養主義がキャンパスの規範文化だった」（竹内 2003: 25）、「読書をつうじた人格形成主義や社会改良主義という意味での教養主義」（25）、「人々は、総合雑誌をつうじて教養主義者になったが、同時に総合雑誌の購読によって教養共同体を形成していたのである」（19）、「教養主義の別名は岩波文庫主義でもあった」（132）、「中間文化こそ戦後の大衆の教養主義だった」（203）など。
- 8) 唐木順三（[1949] 2001: 30）。
- 9) たとえば、「一方では、ズレに注目し、読書の様式をあまりにも生硬なやり方で区別する基準を曖昧にし、集合的なものと民衆的なもの、エリートと私的なものを無意識に結びつける形象を逆転させ、われわれの前に差し出されている二分法をより複雑なものとしなくてはならない」という表現をみよ（Chartier 1992=1993: 53）。
- 10) 円本について、塩原（2002）はこのような収蔵の側面から論じている。書物のモノとしての側面に鮮やかに光をあてた仕事として Price（2012）を参照。
- 11) 高度成長期以後に藤田省三が「読む」という実践にこだわりつづけたのは、同時期に「読む」ことそのものが変質していったからであったのではないか（新倉 2011）。竹内・本堂・武藤編（2017）も参照。
- 12) Wright（2014=2024）。また、Levy（2001）、Black, Muddiman and Plant（2007）、Burke（2014）も参照。MEMEX はヴァネバー・ブッシュが 1945 年の論文「As you may think」のなかで構想した情報検索装置である。
- 13) 「事務能率」の主題と事務機械については新倉（2025）を参照。
- 14) この書については一部、新倉（2024）で論じた。

- 15) 1968年にスチュアート・ブランドによって *Whole Earth Catalogue* が出版された (Turner 2006)。この雑誌が「カタログ」という形式をとっていたことは強調されるべきであろう。
- 16) 『ドラえもん』の主要人物のなかで、ジャイアンだけが座づくえのままである。ジャイアンの家は酒屋を営み、「旧中間層」に属する。
- 17) 「さらに、鋼材事情が好転するなかで、1947年度になると米軍第8軍（英連邦占領軍を含む）からの要求で、賠償物資として大量のスチール家具などの発注が行われるようになる」（『岡村製作所 60 年史』、10）。さらに、「米軍の発注する家具には、米連邦規格 (Federal Spec) があったが、当社はそれに改良を加えて、製品評価を高めていき、やがて全国に駐留する米軍キャンプの、特に将校クラブから発注を受けるようになる」（11）。
- 18) 「工作所における製造高の伸びは著しく…しだいに販売力とのアンバランスが目立つようになった。当社がスチールデスクの新たな市場として一般家庭に注目したのは、このような背景があった」（『イトーキ 100 年史』、75）。
- 19) 「学習づくえが幼いながら市民権を獲得したのは、昭和 37 年とされる。一般事務用スチール・デスクの登場におくれること、3～4 年という見だが、同じくスチール製「学習づくえ」として売り出された。メーカーは伊藤喜工作所で、この段階では、まだバックボードのない普通のデスクにすぎなかった（商品名は「ジュニア・デスク」）。ただし、学習用と銘打つだけに、脚部の端末で伸縮自由高さを調整するようになっていた。また、セット製品であるチェアの高さが同様に高さの調節をできるようになっていた。20 年代の食卓やオヤジの机を借用していたころと一変、とにもかくにも子供専用のデスクが生まれたのである。年代的には、進学競争が活発化する一方、いわゆる団地族が急増しはじめた頃である。新生団地族の間では、また「子供部屋」が定着の方向にあって、やがて専用の学習づくえが根をおろすことになる。新市場開拓に夜も日もない家具メーカーが、指をくわえてこれを見逃すはずはない」（松山 1979: 195-196）。
- 20) たとえば『世界の音楽』全 15 巻 (1966-1968)、『世界の名画』全 5 巻 (1966)、『学習図鑑シリーズ』(1961-)、『科学図説シリーズ』全 12 巻 (1962-1964)、『図説日本文化地理体系』全 18 巻 (1960-)、『図説日本文化史体系』全 14 巻 (1960)、『現代の絵画』全 7 巻 (1963-1964) など。
- 21) フランス百科全書から、日本における百科事典ブーム、CD-ROM によるデジタル化、Wikipedia までの百科事典の歴史の概略については、吉見 (2006) を参照。なおこの論考は平凡社の編集者龍澤武の報告原稿を主に参照している。小学館の百科事典事業については触れられていない。
- 22) このような図像は戦後における家電広告と比較可能かもしれない。また、それ以上に父の不在が注目されるべきかもしれない。現代社会の子どもの

- 教育における母の役割は言うまでもない。また図像では「もうひとりの家族」に、親子三人がいずれも寄りかかり、親密性が強調されている。
- 23) とくに小学館の「書架A型」は図像からみると、天板の奥行が、水平ではなく、ブラウン管のテレビのように斜めになっている。
- 24) 家庭の中心にテレビがあることに関する議論として、Tichi (1991)、Spigel (1992) を参照。「家族誕生」の言葉は、ベットの存在を想起させなくもないが、ここでの新しい家族はだれよりも卓越した知識をもった存在である。『オバケのQ太郎』であれ、『ウメ星デンカ』であれ、『忍者ハットリくん』であれ、『ドラえもん』であれ、藤子・F・不二雄の作品群には、他者が家族に加わる物語の系譜を見出すことができる。それは、無垢で幼児性をもったベット（たいてい市場における交換の結果到来する）がより私性 privacy を強化するように思えるのと対照的であり、高度成長期の家族が、決して核家族として閉鎖されたユニットではなかったことをしめしている。
- 25) 秘書については、Price and Thurschwell ([2005] 2018) を参照。
- 26) 平凡社は雑誌『国民百科』（1962-1967）、『月刊百科』（1967-2011）を出版したが、紙のメディアである百科事典を補い、アップデートさせる試みとして、興味深い。
- 27) このような書物の使用についての議論として、Price (2012) や Piper (2012) を参照。
- 28) 柳田國男が、『明治大正史 世相篇』のなかで「第二の故郷」と呼んだ問題系である（柳田 1931）。
- 29) カードは、近年のメディア論がしばしば取り上げる対象である。Krajewski はカードとカタログの歴史をたどる（Krajewski 2011）。カードと関連する主題としての索引については、Duncan (2022=2023) を参照。また、リストについては、文化技術としてとらえる Young (2017) を参照。近藤 (2025) は、このようなリストの観点から、1980 年代以降のアニメーション文化をとらえなおそうと試みる。また書物文化から情報概念をとらえかえす実践として、Burke (2000=2004; 2012=2015)、Headrick (2000=2011)、Blair et al. eds. (2021) を参照。カードについては、佐藤健二が『読書空間の近代』のなかで、研究主題としての重要性を指摘している（佐藤 1987）。

文献

- Aspray, William and Barbara M. Hayes eds., 2011, *Everyday Information: The Evolution of Information Seeking in America*, MIT Press.
- 東浩紀, 2001, 『オタクから見た日本社会——動物化するポストモダン』講談社.
- Blair, Ann M., 2010, *Too Much to Know: Managing Scholarly Information before the*

- Modern Age*, Yale University Press. (住本規子・廣田篤彦・正岡和恵訳, 2018, 『情報爆発——初期近代ヨーロッパの情報管理術』中央公論新社.)
- Blair, Ann et al. eds., 2021, *Information: A Historical Companion*, Princeton University Press.
- Black, Alistair, Dave Muddiman and Helen Plant, 2007, *The Early Information Society: Information Management in Britain before the Computer*, Ashgate.
- Bruke, Peter, 2000, *A Social History of Knowledge: From Gutenberg to Diderot*, Polity Press. (井山弘幸・城戸淳訳, 2004, 『知識の社会史——知と情報はいかにして商品化したか』新曜社.)
- , 2012, *A Social History of Knowledge: From the Encyclopédie to Wikipedia*, Polity. (井山弘幸訳, 2015, 『知識の社会史 2——百科全書からウィキペディアまで』新曜社.)
- Burke, Colin B., 2014, *Information and Intrigue: From Index Cards to Dewey Decimals to Alger Hiss*, the MIT Press.
- Chartier, Roger, 1992, *L'ordre des livres: lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XIVe et XVIIIe siècle*, Alinea. (長谷川輝夫訳, 1993, 『書物の秩序』文化科学高等研究院出版局.)
- Duncan, Dennis, 2022, *Index, a History of the: a bookish adventure*, Penguin books. (小野木明恵訳, 2023, 『索引 への歴史: 書物史を変えた大発明』光文社.
- 藤子・F・不二雄, 1974, 『ドラえもん』2巻, 小学館.
- , 2019, 『ドラえもん』0巻, 小学館.
- Headrick, Daniel R., 2000, *When Information Came of Age: Technologies of Knowledge in the Age of Reason and Revolution, 1700-1850*, Oxford University Press. (塚原東吾・隠岐さや香訳, 2011, 『情報時代の到来——「理性と革命の時代」における知識のテクノロジー』法政大学出版局.)
- 桧山邦祐, 1979, 『つくえ物語』イトーキ.
- 稲田豊史, 2017, 『ドラがたり』Planets: 第二次惑星開発委員会.
- イトーキ 100 年史編集委員会編集, 1991, 『イトーキ 100 年史』イトーキ.
- 岩田一正, 2018, 『教育メディア空間の言説実践——明治後期から昭和初期までの教育問題の構成』世織書房.
- , 2020, 「教育する家族の生活と教育——成城を事例として」新倉貴仁編『山の手「成城」の社会史——都市・ミドルクラス・文化』青弓社, 134-164.
- 唐木順三, [1949] 2001, 『現代史への試み』燈影社.
- 加藤秀俊, 1963, 『整理学—忙しさからの解放』中央公論社.
- 柏木博, 1991, 「子ども部屋の誕生 = 近代日本の住空間」『群居』(26): 53-58.
- 河野誠哉, 2015, 「学年誌の時代をめぐる社会史的考察」『山梨学院大学経営情報学論集』21: 57-76.

- 近藤和都, 2025, 「『アニメージュ』とリスト——情報の可視化をめぐる文化技術とアニメ経験の変容」永田大輔・近藤和都編, 2025, 『雑誌利用のメディア社会学——文化を可能にする「工夫」』ナカニシヤ書店, 60-73.
- Krajewski, Markus, 2011, *Paper Machines: About Cards & Catalogs, 1548-1929*, the MIT Press.
- Levy, David M., 2001, *Scrolling Forward: Making Sense of Documents in the Digital Age*, Arcade.
- 南博編, 1981, 『ドラえもん研究——子どもにとってマンガとは何か』ブレーン出版.
- 森下達, 2018, 「学習図鑑の定着とその後 のび太はなぜ図鑑に対する態度を変化させたか」『ユリイカ』50(14): 190-196.
- , 2020, 「『ドラえもん』ブームにみるパロディ的想像力」永田大輔・松永伸太郎編『アニメの社会学——アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』ナカニシヤ出版, 175-188.
- 毛利仁美, 2021, 「ゲーム研究における小学館の学年別学習雑誌が有する役割に関する考察」『アート・ドキュメンテーション研究』29: 17-33.
- 新倉貴仁, 2011, 「戦後日本の知識人の語りの構造——藤田省三におけるレトリックと読むことについて」『年報社会学論集』24: 156-167.
- , 2017, 「『能率』の共同体——近代日本におけるミドルクラスとナショナリズム」岩波書店.
- , 2018, 「情報社会化のなかの東京オリンピック——都市, 情報, 身体」石坂友司・松林秀樹編『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』青弓社, 45-64.
- , 2024, 「複製技術と日本語——戦後の国字問題と事務に関する試論」『成城文藝』264: 71(42)-49(64).
- , 2025, 「〈研究ノート〉「事務」の歴史社会学の予備的研究——雑誌『事務と経営』の占領期から1960年代末に関して」『コミュニケーション紀要』35: 53-78.
- 岡村製作所60周年記念社史編纂委員会編集, 2006, 『岡村製作所60年史』岡村製作所.
- Petroski, Henry, 1999, *The Book on the Bookshelf*, Alfred A. Knopf. (池田栄一訳, 2004, 『本棚の歴史』白水社.)
- Price, Leah, 2012, *How to Do Things with Books in Victorian Britain*, Princeton University Press.
- Price, Leah and Pamela Thurschwell, [2005] 2018, *Literary Secretaries/Secretarial Culture*, Routledge.
- Piper, Andrew, 2012, *Book Was There: Reading in Electronic Times*, University of Chicago Press.

- 佐藤健二, 1987, 『読書空間の近代——方法としての柳田国男』 弘文堂.
- 佐藤卓己, 2016, 「学習雑誌とはなにだったか？」『kotoba』 秋号: 28-31.
- 小学館総務局社史編纂室編集, 2004, 『小学館の80年——1922～2002』 小学館.
- 柴野京子, 2009, 『書棚と平台——出版流通というメディア』 弘文堂.
- 塩原亜紀, 2002, 「所蔵される書物——円本ブームと教養主義」『横浜国大言語研究』 (20): 1-10.
- 白石さや, 2013, 『グローバル化した日本のマンガとアニメ』 学術出版会, 日本図書センター.
- 副田義也, 1983, 『マンガ文化』 紀伊國屋書店.
- Spigel, Lynn, 1992, *Make Room for TV: Television and the Family Ideal in Postwar America*, University of Chicago Press.
- 杉田俊介, 2020, 『ドラえもん論——ラジカルな「弱さ」の思想』 日販アイ・ピー・エス.
- 竹内光浩・本堂明・武藤武美編, 2017, 『語る藤田省三——現代の古典をよむということ』 岩波書店.
- 竹内洋, 2003, 『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』 中央公論新社.
- Tichi, Cecelia, 1991, *Electronic Hearth: Creating an American Television Culture*, Oxford University Press.
- Turner, Fred, 2006, *From Counterculture to Cyberculture: Stewart Brand, the Whole Earth Network, and the Rise of Digital Utopianism*, University of Chicago Press.
- 梅棹忠夫, 1969, 『知的生産の技術』 岩波書店.
- ・加藤秀俊・小松左京, 1973, 『百科事典操縦法』 平凡社.
- Wright, Alex, 2014, *Cataloging the World: Paul Otlet and the Birth of the Information Age*, Oxford University Press. (鈴木和博訳, 2024, 『世界目録をつくらうとした男——奇才ポール・オトレと情報化時代の誕生』 みすず書房.)
- 柳田国男, 1931, 『明治大正史 世相篇』 朝日新聞社.
- 山森宙史, 2019, 『「コミックス」のメディア史——モノとしての戦後マンガとその行方』 青弓社.
- 横山泰行, 2005, 『ドラえもん学』 PHP 研究所.
- 吉見俊哉, 2006, 「新百学連環——エンサイクロペディアの思想と知のデジタル・シフト」 石田英敬編『知のデジタル・シフト——誰が知を支配するのか?』 弘文堂, 50-74.
- Young, Liam Cole, 2017, *List Cultures: Knowledge and Poetics from Mesopotamia to Buzzfeed*, Amsterdam University Press.